**山根　昭六 （やまね・しょうろく）**

**１、プロフィール**

20年以上にも及び肺疾患と闘いながら、短歌、小説等を創作し続けた。27歳の頃に構想され書かれた長編『人間序曲』が、没後に友人たちの手により発刊された。

＜生没＞

1928（昭和３）年２月８日 ～ 1975（昭和50）年１月27日

＜代表作＞

作品集『人間序曲』

＜青森との関わり＞

八戸市湊町に生まれる。十代の終わり頃から文芸活動を始める。同人誌「義眼」（八戸で発行）等に作品を発表。

**２、作家解説**

昭和３年八戸市湊町に生まれる。19歳の頃から短歌や詩などを書き始め、職場の機関誌に発表。この頃、埴谷雄高の『死霊』に感銘を受け、以後繰り返し読む。20歳に入ると短編小説を執筆し出す。昭和24年、21歳の時に詩人の村次郎を初めて訪れる。この年の７月に肺結核で入院するが、２年余りの闘病生活後、昭和26年に退院。入院中、病床でペンを取ったり、外国文学（主に実存主義傾向のもの）を耽読する。昭和27年に再入院し、再び２年の療養。この間、短歌を木村靄村主宰の「玄土」に発表。退院後の昭和30年に長編小説の執筆に意欲を燃やし「人間序曲」を構想する。昭和32年より詩誌「義眼」（後に「あるふあ」と改題）に散文詩などを発表し、同人の大久保景造等との交遊が始まる。またこの頃から文芸誌「世代」（八戸市）に長編小説「人間序曲」のうちの数編を発表。昭和34年に上京し、長編小説「地の塩」を書き始める。翌昭和35年に作業中の負傷や体力の限界等から帰郷する。

昭和36年33歳の時に、中里進の勧めで、創作集『逆塔』を出版。昭和38年病気再発により通院し、翌昭和39年に入院。昭和42年には日赤病院に移るが、一時症状が急激に悪化。昭和43年にミニコミ誌「うみねこ」主宰の吉田勇作に原稿を託し、保管を依頼。昭和48年45歳の時に、その才能に嘱目し、創作活動を励まし続けた中里進に「退院はかなわぬ。吉田勇作氏に託した原稿の保存、活用を頼む。」と私信する。この時、盲腸の化膿に長く苦しんだ。２年後の昭和50年１月に呼吸困難となり、永眠。その年の４月友人知人により「遺稿編纂会」が発足し、昭和51年１月に『人間序曲』が出版された。（参考引用文献、作品集『人間序曲』の「年譜」）

**３、資料紹介**

〇『人間序曲』

図書

1976（昭和51）年１月27日

215mm×155mm

「怪死」「青と白」「こうもり」「街」から成る千枚の長編小説。実存主義的な色彩が濃く、必ずしも容易に読み進めはしないが、病苦と戦いながら、完成させた作者の情熱が伝わってくる。